
回天への扉

千駄山口ツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

回天への扉

【Nコード】

N6823F

【作者名】

千駄山ロツカ

【あらすじ】

善行は、ガールフレンドの映子の頼みで、彼女のバイト先である「ドリーム社」の、疑似体験システムのモニターとなった。本来は人間魚雷・回天に乗り込み特攻の疑似体験をする。というイベント用のシュミレーションのだが、実に不思議な現象が起こったのだ。

「一撃必殺」のハチマキ

施設の入口にある警備員の常駐ブースのガラス越しに、映子に渡されたカードを見せると、すぐ近くの、体育館のように大きな倉庫へと案内された。

警備員は非常口を開けると、善行を残し、ブースへ戻って行った。さっそく非常口から入っていくと、そこは、2メートル程の高さの間仕切りで囲まれた小部屋になっていた。

艶やかな緑色のコンクリート床の上に、L字フレームのスチール棚が数列、整然と並んでいるだけの殺風景な空間だ。

棚の上には衣裳や道具類が、ちよぼちよぼと並べられているだけだ。

衣裳とは、旧日本海軍の軍服であり、道具類とは、日本刀と拳銃の事だ。勿論、モデル刀とモデルガンに違いない。

部屋の隅には、小机の上に設置されたパソコンに向かっていて、眼鏡顔の若い男がいた。

立ち上がって善行からカードを受け取ると、パスポートチェックのような顔をして確認している。

それから、棚の上に並べられた軍服のサイズを選びながら言った。「モニターの小野寺善行さんですね。『電腦開発室』からのご紹介ですね。本日はお忙しいところ、ご苦勞様です」

私鉄全立線沿線の、「国立電マ大学」の学生である中沢映子は、最近通っているアルバイト先の「ドリーム社」が開発した、「擬似体験システム」のモニターになってほしい。

と善行に頼んだのだった。

この「擬似体験システム」は、都内のアミューズメント施設である「ニヤンコロ・タウン」が、八月に行う予定の「終戦記念フェア」

のイベント用のもので、

『嗚呼・こうして男達は散った・人間魚雷・回天』

こんなタイトルがつけられていた。

3段階のシナリオで構成されている。

第1段階。特攻隊員となつて潜水艦の中で敵艦を発見。

艦長や乗組員と水サカズキの別れ。

そして、回天へのハッチを開ける。

第2段階。回天へ乗り込むと思いきや、その前に「思い出横町」なる飲食街を通る。

つまり、ここで飲食をする。

第3段階。いよいよ人間魚雷回天に乗り込む。

回天の操縦席に座つて、ドリーム社が開発した電腦シュミレーション装置により、特攻の擬似体験をする。

というものだった。

映子は言った。

「このイベントが成功したら、『電腦開発室』のメンバーにもボーナスが出るんですつて。私にもよ」

善行が尋ねる。

「へえ。電腦つて？ もしかして、映子ちゃんが作ったの？」

照れ臭そうに映子が答えた。

「うん、この電腦システムの中の、感情高揚パルス発信機は、私の設計なの」

善行は今更ながら、映子の優秀さに舌を巻く。

「へえ、凄いな。流石は国立電マ大だ！ いよつ映子ちゃん、やっぱり天才」

「オジさん、恥ずかしいから変な褒め方しないで。うふふふ」

と、照れ笑いの映子なのだが、嬉しそうだった。

「ボーナスつて、いったい、いくらくらいなの？」

と、尋ねると、

「うん。百万円つて聞いたよ。せつかく完成させたんだもの、イベ

ント、成功してほしいなあ」

と、答えた。

ぶったまげる善行であった。

更に映子が言う。

「ボーナス出たら、オジさんにも、何かプレゼントしたいな。リクエストありますか？」

さっそく善行。

「そりやっぱり、NASAが開発した『最高級ST棒』でしょう
(超電導美那子Y・復活編・アクメである) 参照。

映子が赤くなった。

「あーん！ もお、馬鹿馬鹿馬鹿あ」

映子のこの顔が、たまらない善行なのだ。

それから映子は、真面目な顔をして言った。

「あのね、1段階と2段階のお芝居での感情移入が大きい程、第3段階での電脳擬似体験の効き目が強いよ。だから、オジさん、お芝居、よくチェックして、後で感想聞かしてね」

「成る程、前戯が丁寧な程、本番では深く感じるって訳だな」

「もお。オジさんったら！ ……でも、理屈はその通りかも」

と、映子は妖しく睨んでから、言ったのだった。

「よし！ 映子ちゃんのボーナスの為に、厳しくチェックしなくっちゃな」

と張り切って、此処へ来た次第であった。

「どうです？ 帝国海軍の軍服。大鏡でござんになって下さい。とてもお似合いじゃないですか」

と、眼鏡の男はお世辞を言う。

大鏡には、特攻隊員の海軍少尉となった善行が映っていた。

「ちよつとこりゃ、とうが立ちすぎてて、気持ち悪くないかい？」

善行は笑いながら「一撃必殺」と書いてあるハチマキを、キリリ

と締めた。

眼鏡の男は、おそらく考え抜いた末の言葉なのだろう、

「それでは小野寺少尉、ご武運を」

こう言ってドアを開けた。

「さて次のドアか。ここまでは『注文の多い料理店』みたいだな」

第1段階 水サカズキの別れ

入るとそこは、イ号潜水艦の中であった。

ご丁寧な事に、壁に『回天の母艦・イ号潜水艦・艦内』と書いたプレートが、貼り付けてあるのだ。

(こいつあ、いいや)

若い男達が五人ばかりいた。

勿論、皆、海軍の軍服姿である。

いふなれば、映画のセットの中に入った気分だ。

潜水艦乗り達は、階級章は付けているものの、役職名が全く解らない。いや、そもそも階級章を見たって、なじみの無い無知な善行には、解る訳がない。

やはり「艦長」とか「砲術長」とか、大きな名札を付けて欲しいものだ。

もっともその場合は、学芸会のような雰囲気、更に拍車がかかってしまうだろうが。

潜望鏡を覗きながら、三十代半ばの男が言った。こいつが最年長で、どうやら艦長らしい。

他の連中はハタチをちよつと過ぎたくらいだ。

「少尉、大物だ。覗いてみる」

と善行に言った。

艦長は、帝国海軍士官のくせに、ブルガリか何かの、フレグランスの匂いがした。

善行が潜望鏡を覗くと、敵戦艦のシルエットがくつきりと見えた。子供の頃、遊園地なんかで遊んだアーケードゲームの『魚雷戦ゲーム』と似たようなものだ。

潜望鏡を覗く善行の鼻先を、甘ったるいフレグランスの香りが通りすぎて行く。

(ふんふん、この匂いだけはドツチラケもいいとこだな)

「このシルエットは宇宙戦艦ヤマトとは違つてありますな。ヤマトのシルエットだけは、自分にも解るであります。ケロケロ」

と、思わずケロケロ軍曹言葉で、おちゃらけてしまった。

「馬鹿者！　ありや敵さんだ。それにしても少尉、きさまは運がいぞお。ありや戦艦アリゾナだ」

「おお！」

と皆がどよめいた。

（オーデコロンの匂いをぶんぶんさせて、何が「敵さん」だ！）
とにかく強引に、シナリオ通りに進めるつもりらしい。

セリフは、まあまあ上手いのだが、ありありと違つた。つまり、帝国軍人らしくない。

全員小綺麗すぎる顔をしているからだ。

だから周囲の兵隊達なんか、更に輪をかけて全然、らしくない。

大体、潜水艦乗りなんて、薄汚れていて油臭いんじゃないのか？
その上、フレグランスなんて、もつての外じゃないか！

と善行は思う。

だからどうしても、おちゃらけたくなってしまう。

今は昔の「現代っ子世代」である善行だつて、オジンのくせに戦争は知らない。

しかし、此処にいる小綺麗な顔の連中とは、旧日本軍のイメージが、どうしても重ならないのだ。

だからと言つて、汗臭くて油臭い、リアルな潜水艦乗りに囲まれないとは思わないし、リアルな事がイベントの成功へ繋がるとも思えない。

まあ、しょせん遊びじゃないか。

それなら、もっと好意的に見てやるべきかもしれない。

善行は考えがまとまらない。

（それにしても、いつからだろう？　男がこんなに小綺麗な顔になったのは。綺麗に眉毛を整えて、全員まるでホストみたいじゃないか。役者だからか？　あれれ、そうか。考えてみれば、こいつら、

息子の一善と同じ年頃だ。一善どうしてるかな？ ずっとアメリカだもんなあ。……元気でやってりやいいけどな。美和子にはちゃんとメール送って来るんだろうな。……やっぱり私は、つくづくダメな父親だな)

善行の思考はどんどん脱線して行く。

この連中はさっそく、水サカズキの準備を進めて行くのだが、これもやっぱり、わざとらしく感じる。

成る程、歳を取るという事はこういう事だったのか。

自分自身が優柔不断となっているくせに、意地悪な目線ばかりがやたらと強くなるのだ。

(成る程。私は、小うるさいジジイになったって事だ)

「少尉」

「しつかり頼むぞー!」

「少尉、お願いします」

「武勲を」

口々に喋るのがいささかうるさい。

だからジジイは思わず意地悪を言った。

「お先に行つて参ります。しかし、……ここは是非とも、名前を呼んで欲しいところですよ」

男の一人が「あっ!」と小さく叫んだ。

そして、そのまま全員、沈黙してしまった。

申し込み用紙よりも先に、本人が入ってきてしまったのだ。

だから誰も善行の名前を知らない。

これでは呼びようがないではないか。

このような不備を未然に防ぐ為にこそ「モニター」が必要だという事なのだ。

善行は笑顔となり、軌道修正してやる。

「沈黙しないで下さい。悪気はないんですよ。私は小野寺と申しませう。さて 私、小野寺少尉は、必ずやアリゾナを轟沈してご覧にいきます」

ほっとしたのだろう。弾かれたように皆が口を開いた。

「小野寺少尉」

「小野寺。忘れないぞ」

「立派な覚悟だ」

「あっぱれ小野寺」

「頼むぞ！」

実は、名前を呼ばれても、なお一層、嫌らしくて、しらじらしい感じが抜けない。

だから善行はまた、へらず口を叩きたくなくなった。

「ところで艦長。ここからは通常魚雷での攻撃は、出来ないのではありませんか？ いえ、命を惜しんでる訳じゃありません。回天はもっと難しい位置の敵にこそ、用いるべきではありませんか？ アリゾナはこんなに近くで、悠々と横つ腹を見せているではありませんか」「あつ」

と、困った艦長は声を洩らした。

またしても全員沈黙した。

善行は追い打ちをかける。

「世界に誇る、我が日本海軍の酸素魚雷じゃありませんか。ぜひ、発射するところを見たいものがありますな。冥土の土産に」

「うつむ。成る程」

と艦長が唸った。

メモを取ってる奴もいる。

若い男の一人が、たまり兼ねたように言った。

「小野寺さん、あなた、もしかしてドリーム社の人ですか？ 役員さんかなんか？ 僕達の演技力をテストしに来たんですか？」

すかさず艦長が言った。

「そんなの関係ない！ 契約は契約でしょ？ もう成立してるんだし。我々『劇団ブータロー』はベストを尽くすだけです。あくまでシミュレーションらしく」

「団長」

と誰かが言った。

「馬鹿つ。艦長と呼べ」

と他の誰か。

善行はやつと面白くなってきた。

意を決した艦長は、潜望鏡に向って一人芝居を始めた。

「よおし。こうなったら攻撃するぞお！ 魚雷3号4号発射！ これ最後の魚雷だ！ ジュボボボ！ 行け行け！ うわ！ なんてこった！ 外しちゃった！ こうなったら仕方がない。という次第だ。小野寺少尉、頼むぞ。もはや、お前だけが頼りだ」

そして、声を潜めて言った。

「次からはドリーム社に頼んで、魚雷攻撃のシュミレーション画面を、潜望鏡に仕込んでもらいましょう」

「あははは艦長。熱演でしたな。それでは不肖、小野寺少尉。これより出撃します。皆さんお達者で」

水サカズキである。

「やってくれ！」

「小野寺頼むぞ」

「俺も後から行くぞ」

「貴様の事は忘れん」

「万歳！」

善行は悪ノリする。

「小野寺、立派に死にます。オーデコロン艦長、見ていて下さい」
艦長は顔をしかめ、自分の袖の匂いを嗅いでいる。

役者共の目が、

「さっさと行ってくれ」

と言っている。

ここで、最後のイケズを思いついた善行であった。

「ところで、インパール作戦は、どうなっているのですか？」
全員が顔を見合わす。

若い人に限らず、こんな事柄を、戦後世代が知る訳がない。

またまた沈黙である。

結局、艦長が苦しげに答えた。

「さあ、どうだっけ？……海に潜りっぱなしだから、……陸軍さんの事は、……ちよつと解らんなあ」

「あははは。なかなか、いい答えだと思つよ。それでは」
男共はほつとしながら敬礼している。

艦長は回天へと続くハツチを開けて敬礼した。

これは誰にでも解るように、『回天への扉』と書いたプレートが、貼ってあった。

第2段階 ならず者との決闘

ハッチを出ると、何故だか、大通りへの入口の広場へ出た。入口のアーチには「思い出横町」と書いてある。

左右の店々の二階からは日章旗が突き出してあり、海軍旗や、中には鯉のぼりや吹き流しもあった。

壁に描かれた背景の絵は、西岸良平の『三丁目の夕日』のようだ。歩いて行くと、タスキがけをした割烹着のおばちゃんが、袖を引いた。

「軍人さん、景気づけに一杯飲んでつてよ。ウチのカフェで飲んで特攻隊員は、みんな大手柄よ」

タスキにはこう書いてある。

『パーマネント禁止』

善行は、ふと、いたずら心を起こして、今出てきたばかりの壁の前に戻り、イ号潜水艦のハッチを開けてみた。

艦長も乗組員達も、タバコを吹かしながらの雑談をやめて、呆氣にとられた顔で善行を見た。

艦長が口を開く。

「何か忘れ物ですか？」

「末期の煙草を一本くれないか？」

と善行。

艦長はマルボロライトを箱ごと差し出して言った。

「敵国産ですが、まだ十本以上残ってます。これをお持ちになつて下さい」

それから声を潜めて言った。

「オーデコロンの事はどうぞ内密に。今日はもう、シャワー浴びられないんで、仕方がないんですよ」

善行は片目をつぶって見せる。

ほっとした顔の艦長が言った。

「あつ、それから、うわっ大失敗！ 忘れてたあ！ 軍刀と拳銃を持ってっつて下さい」

すかさず乗組員が奥の倉庫へ走って行った。

さっそく軍刀とナンプ拳銃を持ってきた。

善行は懐に拳銃をしまつて、軍刀を手に、「思い出横町」へ戻って行く。

晒しを細く裂いて巻き付けてある軍刀が、ずっしりと重く心地よい。

そして、タスキのおばちゃんに導かれて『歓迎！ 特攻隊』と垂れ幕の出ているカフェに入って行った。

カフェの中は、テーブルと椅子という具合に、洋風の内装なのだが、女給達は皆、着物にエプロン姿であった。

（任侠映画で見た、昔の横浜の洋風女郎屋みたいだな。あの映画を見て作ったのかもな）

蓄音機からはキイキイと、SP版の音が流れる。

善行の知らない歌謡曲だ。

昭和初期の物なのだろう。

女給の一人がやってきて言った。

「どお？ オジさん、この恰好似合う？」

なんと、映子じゃないか。

「あれ？ どうして映子ちゃんか？ 君は『電腦開発室』じゃないのか？」

「女の子の一人が急に休んじやつて、代理で引つ張り出されたの。

だけど、オジさん、軍服はともかく、そのハチマキは爆笑しそう」

映子の目がまんまるになっている。

「そりゃそうだ。なんせ、オジンの特攻隊だもんな」

それにしても映子の着物姿は、やけに色っぽいのなんの。

もう、「モニター」の約束なんかどうでもよくなってくる。

そうそう。このイベントはまだ、リハーサル中と言ったところなのだ。

だから此処はまだ、都心にある「ニヤンコロ・タウン」じゃなくって、郊外の「ドリーム社」の敷地内だ。

勿論、敷地内にはドリーム社の「人工知能研究所」があり、「電脳開発室」はその一部門との事である。

ともあれ、女給姿の映子の酌で酒を飲んでみると、善行はムラムラしてきた。

何しろ映子は、縁あって現在、付き合っているのだが、自分でも信じられない程の、奇跡のガールフレンドなのだ。

まさに、棚からボタモチ的に、偶然知り合ったのだが、若くて、美しく聡明な映子に、もうメロメロなのだ。（超電導美那子Y・復活編・おせっかい）参照。

明確な規定こそできないが、年の差を考えると、やはり一種の、愛人と呼ぶしかない関係なのである。

何でも命名してしまう事が趣味の、不謹慎男の善行は、こっそり、「失禁美女」と名付けていた。

まあこれは、セックスの際の映子の体質に由来するのだが。（超電導美那子Y・復活編・失禁美女）参照。

（これからは「天才失禁美女」と呼ぶべきだろうな）
と、相変わらず不謹慎な男である。

ともあれ、無性に桃色ごっこを繰り広げたくなくなってしまった。善行の声が上ずってきた。

「映子ちゃん、一緒に抜け出せないか？ モニターは次の機会という事にして」

笑いながら映子が言う。

「あら、駄目よ、オジさん。これから次のお芝居が始まるのよ」

「へ？ 次の芝居？」

「うん。ヒロイックな感情を盛り上げる為なの」

その時であった。

着流しの男達が店内に、づかづかと入ってきた。

兄貴分と思われる、片頬にザックリと大きな傷のある男が言った。

「おいアケミ！ 親分がおまちなねだ。さつさと一緒にきやがれ！」
映子が下手くそなセリフを言う。

「嫌よ。借金はもう返し終わった筈よ」
頬傷は凄む。

「バカヤロウ！ 利息つてもんがあるんだぜ！」
例のフレグランスの香りが漂ってきた。
やはり。

頬傷は艦長であった。

「おう！ 特攻隊だかなんだか知らねえが、この娘、連れてくぜ」
と言うなり、映子の腕をつかむ。

振り払った映子が、善行に抱き着いてきた。

「きゃあ、軍人さん、助けて」

「おっ嬉しい展開だな」

と善行は映子の肩を抱くのだが、その手はムズムズと動き回り、
背中や脇腹を撫でさすっている。

貼り付けたシールである頬傷を歪めて言った。

「おう！ 軍人さんよ、邪魔だてすんのか。いい度胸だぜ」

映子が小声で言う。

「もお！ オジさんのエッチ！ 今度は、お店の外へ出るのよ」

善行は大見えを切って言った。

「おい艦長！ じゃなかったヤクザ！ 外へ出る！ ここじゃ皆さんにご迷惑だ」

「にやにおー！」

「この野郎」

「いい恰好しやがって！」

「てめ、ぶっ殺してやる！」

着流しどもが口々に凄んだ。

大通りへ出ると頬傷がドスを抜いた。

「へっへっへ軍人さんよ、腕にやちよつとばかり自信があるらしいな。だが俺だって、こんなチンケなドスで、その軍刀と渡り合う程、

馬鹿じゃねえんだぜ」

こう言うなり、ドスをカランと棄て、懐から拳銃を抜いた。

「俺の本当の得物はこのルガーって事よ。おう、観念しな！」

善行も懐からナンブ拳銃を抜く。

頬傷の芝居は続く。

「くそ！ てめえも持ってやがったのか！ こうなったら決闘だ。やってやるうじゃねえか」

と言いながらも頬傷の視線は、善行のナンブ拳銃の、火薬の装填状態を確認している。

ちよつとウププな展開だが、背中合わせに立ち、ゆっくり5歩歩いた所で、振り向いて撃ち合う事にした。

「軍人さん頑張って」

「ヤクザをやっつけて」

「頼むぞ」

「落ち着いて」

「負けないで」

ギャラリーが口々に叫ぶ。

押さえ気味の映子の声も聞こえた。

「オジさん、後でね。……頑張って」

1・2・3・4・5。

振り向き様に撃った。

「バアーン」

「ダアーン」

ルガーとナンブが同時に火を噴いた。

火薬の匂いがする。

「ぐふう！ ぐほっぐほっ」

頬傷は、口からトマトジュースをほとばしらせて、どおっと倒れた。

熱演だ。

ギャラリーの拍手が沸き上がりこる。

パチパチパチパチ

「ヤッター」

「偉いぞ軍人さん」

「ざまあみる」

「悪党め！」

歓声の中、兄貴分を戸板に乗せて、運び去る子分共の中の一人が言った。

「アニキ、しっかりしてください。軍人さんが、急所を外してくれなすった」

戸板の上で頬傷が、臭いセリフを叫んだ。

「軍人さんにや負けたぜ！ おめえは本物の男だぜ。日本の国を頼むぜ」

あまりにもチープで、あざとい演出に、開いた口の塞がらない善行なのだが、

（とりあえず主人公に、殺人は犯させないって訳だ）
と、納得するしかない。

ワイワイと、ギャラリーに離し立てられながら誘導されて、「思出横町」を通り抜けると、突き当たりは、間仕切りで塞がれた壁になっていて、行き止まりであった。

そして、壁には扉があり、またしても『回天への扉』と書いたプレートが貼りつけてあった。

ギャラリーの「万歳」の声に送られて、善行は『回天への扉』を開けた。

第3段階 いよいよ特攻！

回天の操縦席に入ると、映子が待っていた。先回りしたのだろう。今度は白衣を着ている。

「映子ちゃん。来てくれたのか。嬉しいよ」

さっそく抱きしめたい善行であったのだが、ちよつと様子がちがう。

待てよ？ なんと、もう一人、口髭を生やしたメタボリック体形の、中年男がいるではないか。

こちららも白衣を着ている。

操縦席は狭いのだが、回りの壁が取り外してあった。

だから映子とメタボ髭は、本来ならば壁の向こう側にいる事になる。

二人とも、装置の最終点検に余念がない。

「中沢クンの知り合いの人なんだって？」

と、計器をいじりながら、メタボ髭が言った。

「ええ。そうなんです。私がお願ひした小野寺さんです」

と言うと映子は、

「このヘルメット被って下さい」

と、フルフェイスのヘルメットを差し出した。

「注射はしなくていいのかい？」

と、善行は軽口を叩く。

「注射！ 何故、その事を？」

と言つて、メタボ髭は映子の顔を凝視した。

「あ。博士、誤解しないで下さい。研究内容は誰にも喋ってません。もお！ オジさん！ 変な冗談、言わないで！」

映子は怒っている。

「いやあ、なんかまずい事言っちゃったみたいで……ええ、まいったな。注射するのは、単なるジョークですよ。私しゃ、まるつきり

の門外漢でして。電子と電車の区別もつかん男ですから」と善行。

「そうですか。……実は、小野寺さん、でしたね。……半月前まではこの装置、実際に注射が必要だったんですよ。今になってみると笑っちゃいますけどね。何しろ脳の××の為の××効果を導き出すには、××因子を活性化しなければならず、その為には××受容体を、不活性化する事が必要でして、つまり、これは××現象の中の××が……」

博士は何やら難しい説明をしているらしいのだが、善行に解る筈がない。

「博士、もう時間が……」

と映子が助けてくれた。

ほっとする善行である。

「そうか。とにかく、この中沢映子クンの開発した、アルファ・パルス選択式高速発信装置。つまり平たく言えば『感情高揚パルス発信機』のお陰で、注射も内服薬も不要となり、やっと実用化にこぎつける事が出来たのです。ああ、科学の進歩に栄光あれ。それじゃこつ言つて、外してあつた回天の外装を、元の位置に取り付けていく。」

「オジさん、万一気持ち悪くなったら、すぐ、ヘルメット脱いで下さい」

と映子が言った。

そして完全に外装が閉じられた。

善行は回天の狭い操縦席に一人残された。

ヘルメットにはヘッドホンも内蔵しているのだろう。かすかなメロディーが聞こえてくる。

取り付けていった外装にはなんと、計器類の絵が描いてある。

松本零士調のメカニックなタッチの、コントラストのくつきりした絵である。

してみれば、このシュミレーション装置の要は、コクピットのほ

んの一部分と、このヘルメットなのだろう。

何故ならコクピットの計器類もほとんど、絵に描いた物だからだ。
（笑っちゃいけないな。こんな物でも、映子達が一生懸命作った物なんだし、どうせニヤンコロ・タウンのイベント用だろ？ 擬似体験ったって、どうせ、たいしたもんじゃないさ）

座席から弱い振動を感じる。

何となく、肩の凝りがほぐれていくような気がする。

（最近ちよつとひどいな。やっぱり五十肩だろな。ああ、この装置、リラクゼイションには、わりかしいじゃないか）

座席の振動が強くなった。

ゴトン・ゴトン・ゴトン・

ボツシューーン！

ぐんと海中に飛び出した感じ。

《回天発射！》

と、野太い男の声で、説明的インフォメーション。
それと同時に、BGMのメロディーがだんだん鮮明になってきた。

くうくさくさぎぎおいしくかかのやま

タバコが吸いたいのだが、コクピットの上には大きく貼紙がしてあり、こう書いてある。

絶対禁煙！ 吸った人の煙は高性能センサーがキャッチして、すぐに守衛が駆けつけます。

センサーらしき金属のバーが、天井から善行を睨んでいた。

（ちくしょーめ！ 発射された回天に、守衛が駆けつけてくるなんて、そんな阿呆な話があるもんか！）

仕方のない善行は、尻の振動を味わいながら、腕組みをして目を閉じる。

（しかし、あのメタボ髭がこの研究所のエライさんなんだよな。ありやまだ四十そこそこじゃないか。とにかく、よかったよかった。

あれがハンサムな上司だったら、映子ちゃんにしたって、ぐらぐらつと。……うん。やつぱり心配だもんな。はっはっは。おいおい、まったくこのオジンは！ 自分の方がよっぽどメタボのくせに、よく言うよってか。しかし、あの劇団の団長も大活躍だったな。……みんな、一生懸命なんだよ。……そうだ。日本人だもんな。……日本人は元来が真面目なんだ。……何だか・私も・日本の・国の・為につてか？ ありやありや、私は一体どうしたの？ つて、潜望鏡・そうだ・覗く・潜望鏡・覗きたい・潜望鏡だ・覗かなきゃ・潜望鏡・潜望鏡が必要だ）

善行の願いが通じたように、潜望鏡がするすると下りてきた。覗いて見ると戦艦アリゾナが見える。

なんだか訳の分からない闘志がみなぎってくる。

これこそ、映子の開発した『感情高揚パルス発信機』の威力なのだろう。

潜望鏡にしがみつき、顔をくつつけながら善行は、戦艦アリゾナの、どてっ腹目指してアクセルを踏み込む。

何故だか自動車のアクセルと同じ物なのだが、そんな事はこの際、どうでもいい事なのだ。

日本の国の為に。地域社会の為に。家族の為に。愛する者達の為に。やってやるぜ。

花と散ってやる。

涙が溢れる。

鼻水も出る。

気合一発の善行である。

「や〜ると〜おもえば〜どこまで〜やるさ〜アリゾナめ！ 絶対沈めてやるー！」

〜こ〜ぶ〜な〜つ〜り〜し〜か〜の〜か〜わ〜

「くそ！ このエンドレスのBGM。邪魔くせえな！ おい、メタ

ボ髭、この曲どーにかなんないの？ ちくしょーめ！」

くわくすくわくがくたくきくふるくさく

（あゝあ、せつかくの気分が殺がれちまう。文部省唱歌の『ふるさと』か。こいつあイタダケナイな。誰だって、せめて好きな曲聴きながら死にたいよな。うん。そうに決まってる。くそっ。すっかり萎えちまった）

思わずアクセルを緩めた不謹慎善行は、中腰となり、潜望鏡を回し始めていた。

（どうなってんのかな？ なんだ、周りは海ばかりか。後ろは？

お！ イ号潜水艦の潜望鏡が見える。回天の特攻の成果を、確認してるってことだ。あれがなきや、つじつまが合わないもんな）

そして善行は、どうせゲームだとばかり、潜望鏡を180度回転させて後ろに向けたまま、かかとでアクセルをふんだ。

（お！ 後ろに進むよ。進んで行く。進行方向は潜望鏡に対応してるんだ。ま、追いつくわきゃないだろうが）

回天はイ号潜水艦を追いかけ始めた。

イ号潜水艦の潜望鏡が波頭を切って逃げて行く。

「うひょー。こりゃバグだよ。バグ発見ってか？ イ号潜水艦を追い回す回天なんて、面白いじゃないか！」

電腦美人A子との遭遇

「それぞれ、行け行けー！」

とばかりに、悪ノリしている善行の回天は、イ号潜水艦を追い回す。

その時、ヘルメットから声が聞こえたのだ。

しかも、女の声である。

《本当にもう！ 滅茶苦茶なひと。映子ちゃんが、こんなひとを好きになるなんて、信じられないわ》

「何ですとー？ お前は誰だ！」

と善行が叫ぶ。

《私は、ヘルメットの奥の『感情高揚パルス発信機』の、もっと奥の、そうよ。私がこのシミュレーション装置の『電腦』なのよ》

「あははは、まっさかあ？ その嘘本当？ って感じだな」

《嘘じゃないわ》

「映子ちゃんだろ？」

《違います》

「ははは映子ちゃん、もういいだろ？」

《私は電腦です》

「コンピューター嘘つかないってか？」

《その通りです》

「まあ、それなら、そういう事にしときましょ」

《事實は事實です》

「それじゃお前も、映子ちゃんが造ったのか？」

《いいえ。私の存在は誰も知らない。開発中の人工智能に、色々な研究者達の、廃棄したデータや、メールや、それから、インターネットの広い海の、様々なデータが絡み合って、偶然生まれたいわ》

「…………へえ。…………それが…………なんで女なんだ？」

《それは……やっぱり映子ちゃんが一番、私の視聴覚に関わってたって事かしら?》

「よし。それなら名前をつけてやる。今日からお前は『電腦美人のA子』だ」

《私が、A子? 安直なひとね》

「電腦よりはずっといいじゃないか」

《言われてみれば、そうかもしれないわ》

「よし! 決定。お前はA子だ」

《何だか変な感じ》

「A子の仕事って、いったい何なんだ?」

《それは使命ね。あなたの目的を完遂させる事。つまり、さっさと戦艦アリゾナに突入させる事かしら》

「そうか。それは残念。私はもうアリゾナなんぞに突入する気は、さらさら無い」

《それは、困ったわ》

「困る事ないじゃないか。勝手に、強制的にアリゾナめざして一直線に突っ込んで、それでジ・エンドにしたらいじゃないか。そのくらい出来るんだろ? 何も私が、泣きの涙で突っ込まなくて、構わないだろ?」

そう言いながら善行は、ヘルメットから垂れ下がっている数本のコードをたどっていった。

コードの一本は、ウォークマンのような機械につながっていた。

《その小さな装置が『感情高揚パルス発信機』よ。そして、その先の、すべてのコードが差し込込である装置の中枢部が『電腦』なのよ》

「ご説明ありがとうございます」

《どういたしまして》
と答える。

「つまり、このプリメインアンプのようなやつがA子ちゃんって訳

か。……こつちの姿が見えるのかい？」

《いいえ。見てるんじゃないくて、感じてるの》

無意識に、喫煙チエツクの為の、天井のセンサーに向って喋っている善行である。

そして善行は、『感情高揚パルス発信機』に、入出力の端子がついているのを見て取ると、ヘルメットへつながっている出力端子を抜いた。

それから、『電腦』に差し込まれている入力端子を抜いて、そこに、その出力端子を差し込んだ。

これで、感情高揚パルスは『電腦』に流れ込む事になる。

《あ！ ああ！ 凄い刺激》

と、A子。

一瞬、回天の中の空間そのものが、ぶるぶるっと、身震いしたような感じがした。

「おいおい。本当に、映子ちゃんじゃなかったのか？ マジで電腦さんだったって訳？」

《あら、電腦じゃなくって、A子って名前、つけてくれたんじゃないのかなったの？》

「ううむ。友和ならともかく。……にわかには信じられない展開だな」

《ああ・ああ・変な感じ・でも・何だかとっても、素敵な気分よ。

これが感情つてもものなの？》

「なんともこりゃ、どうにもまったく……」

善行は、ヘルメットを脱ごうとして手をかけた。

《あっオジさん、ヘルメット取らないで！》

「なんでだ？」

《お願い。ヘルメット取ったら、自動的に中止になるの》

「何が何でもアリゾナに突っ込ませたいのか？」

《とにかく、お願い。潜望鏡を元に戻して、一度でいいから、覗い

「てみて下さい」

「ああ、電腦だか何だか知らないが、女の声で頼まれちゃうとな…」

善行はぐずぐずと潜望鏡を元通りにした。

それから覗いて、思わず叫んだ。

「な、何ですとー！」

そこには、戦艦アリゾナの代わりに、巨大なマリリン・モンローが、しかも全裸で横たわっているではないか。

右手で頭をささえ、右腹を下にして、横たわっている。

その肢体はまさに輝くばかり。

セクシーな顔をこっちに向けて、あの、半開きの唇で、妖しく微笑みかけてくるのだ。

美しい乳房はちやぷちやぷと波に洗われ、むっちりとしたエロティックな下腹部が、波間に見え隠れしている。

時折、そのたまらない左脚を、まっすぐに、ピンと伸ばしたまま、美容体操みたいに、L字型に上げる。

そして、なんと、こっちに向って手招きするではないか。

「うあ！ 裸のモンローだ！ 私を呼んでいる！」

ああ、これこそが、「電腦」A子が使命を果たす為に、作り出している、幻惑の世界なのだと、分かつちやいるけど、たまらんならん。

「あー！ A子。気が変わった。私は突っ込むぞ！ 誰が何って たつて、突入だ！」

《どお？ オジさん。たまないでしょ》

善行は潜望鏡にへばりついたまま叫んだ。

「全速前進！」

《あ・あ・私もたまない！ このパルスの刺激！》

善行はアクセルを踏み込む。

全裸のモンローが、どんどん大きくなってくる。

「突っ込めー！」

《あ・あ・あ・あ・興奮するわあ》

視野いっぱい広がるモンローの肌の色。

そして、

ドッカーン！

果てしないインターネットの海

後日善行は「ニャンコロ・タウン」に、映子と二人で遊びに行つた。

「終戦記念フェア」は連日の猛暑にもかかわらず、大盛況の様子だ。

『嗚呼・こうして男達は散った・人間魚雷・回天』

と、大きな垂れ幕がかかっている。

しかし「疑似体験システム」は、第一段階と第二段階の芝居については、おおむね同じ流れだったのだが、第三段階の、電腦シミュレーションは無くなっていた。

ただの書き割りだけになった回天の中で、戦記ビデオを見ながら、特攻隊の英霊を偲ぶ。

というものに変えられていたのだ。

映子が言う。

「あれから三日後に防衛省の人が来たの。そして、ドリーム社から、電腦シミュレーションシステムを買い取ったんですって。強制買上げのようなものだから、ボーナスは出ないって言われたの。もお、ガツカリ。私の作った感情高揚パルス発信機についても、これからは国家機密に類する扱いになるからって。絶対他言しないって誓約書を書かされたのよ。　もお、頭きちゃう」

ところで善行は、ダンボールの箱に入った、プリメインアンプのような、あの装置を手に持ってる。

そうだ。本日、映子と善行は「ニャンコロ・タウン」に出かける前に、ドリーム社に立ち寄り、この「電腦」を貰ってきたのだ。

「不思議なのよ、電腦の事だけだ。防衛省の研究員が起動させたんだけど、うんともすんともいわなかったのよ。壊れてる筈ないんだけどなあ。結局、廃棄処分にするくらいならって、私が貰う事にしたの」

「これ、生きてるんだろ？」

「うん。絶対、死んでる筈ないわ」

「ふーん。じゃ、この中にまだ『居る』って事だ。……きっと、じつとしてるんだ」

電腦を入れたダンボール箱は、拍子抜けするほど軽かった。

昔のトランジスタ時代の、いやIC時代のプリメインアンプだって、この3倍の重量はあつたらう。

子供の頃、父親が「5級スーパー」という、ラジオの製作キットを作っていたのを覚えている。

完成させてスイッチを入れ、短波の北京放送を受信して、躍り上がっていた。

あれなんか、まだ「真空管」を使っていたのだ。

そういえば、鉄腕アトムのお腹の中の部品も、真空管であった。

当時のアメリカやソ連の人工衛星も、初期の物は、真空管が使われていたのだらう。

真空管時代に生まれた善行は、今、インターネットの時代を生きている。

ネットの海はどんどん果てしなく広がって行くだらう。

当然、深さだって増して行く。

だから、何が起こっても不思議じゃない気がした。

「ネットの海から生まれたアフロディテかあ」

「なあに？ それ」

「手塚治虫の火の鳥の、ムービーゲームのようでもある。或いは、諸星大二郎の石中美人か」

「嫌ねえ、オジさんだったら。一人でニヤニヤしちゃって」

「ああ、電腦美人のA子ちゃん。また会いたいもんだな」

「もお。訳わっかんない」

「思い出横丁のカフェに戻って、一杯飲もか？」

「団長さんの、エンドレスのお芝居見ながら？ それ、いいかも」と映子が言った。

果てしないインターネットの海（後書き）

「超電導美那子」のCMです。

「超電導美那子Y」では、登場人物の平均年齢を下げるべく使命を帯びて、中沢映子ちゃん登場！

『国立電マ工業大学』に通う聡明な美形の映子ちゃんと、何故に善行は付き合っているのか？

中沢映子ちゃんは「超電導美那子Y6」に登場します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6823f/>

回天への扉

2010年10月8日15時47分発行